見たところ驟雨の消え去りそうな空であったから、売店で求めた地方紙を小脇に挟んで駅舎を出ると、光岡は小雨のぱらつく街をぶらぶらと歩いていった。湖畔の街にはやはり傘を持たない行楽客が雨宿りをするでもなく歩いている。車も多い。夜には湖上を彩る花火が見られる季節で、その日は学生らしい若い人影が目立った。

光岡も気散じを兼ねて東京から出かけてきた口だが、花火そのものに関心があるわけではなく、久しぶりの高地の空気に浄化作用を期待してきたにすぎない。それでいてきてしまえば、ああこんなだったな、と思うだけであった。前にきたときよりも商売屋の看板に横文字が増えて、温泉場は鄙びた風情が薄れていたが、それも時代だから仕方がないと思うよりほかなかった。垢抜けない古い街並みに休らいを覚える彼は、東京の暮らしが息苦しくなるとふらりと旅に出るということを繰り返してきた。我慢して精神をとことん痛めたことがあるので、家族は寛容であった。

大通りを歩くうちに雨が上がって、うっすらと輝いて見える十字路をひとつふたつ過ぎるともう諏訪湖であった。予約した旅館はほとりにあって、外観からして湯宿といった風趣の老舗である。今も部屋で食事を摂れるのがよく、また広すぎない内湯も彼の好みに合っていた。前庭の駐車場に親しい女の車を見つけると、ずいぶん早くきたものだなと思いながら、ほっとする気持ちであった。

長いつきあいになる女は塩尻の漆器店の人で漆工でもある。生活のための仕事と創作を天秤にかけると、未だに生活の方が重たい人であろう。光岡は彼女の漆器を買うことで創作を助けてきたようなところがあるが、それを足枷にしたことはなかった。そのためによくある男女の悪縁にゆきつくことにはならなかった。物事を流れに任せる性質が双方にあって、穏やかにつづく歳月が生まれたのかもしれない。

彼が朝比奈涼子を知ったのはもう十年より前のことになる。たまに出かける青山で食器店のショウウィンドウに目を引かれ、ふらりと入ったのが縁のはじまりであった。高級な陶磁器の並ぶ店に、その日は黒い漆器がこれ見よがしに飾られていて、漆の控えめな光沢が彼の疲れた目を癒やした。中でも非常にシンプルで押しつけがましい加飾のない盛器が瀞のように美しく、添え書きに〝伝統工芸展入賞作品、曲輪造盛器、朝比奈涼子作〟とあるのを見ると、まさかと思った。そんな逸品が街中の食器店で売られているはずがないと疑い、店員に訊ねると、本物です、という返事であった。

盛器は重ねられるようにできていて、棚にはふたつあった。

「これを五つほしいが、あるかね」

「ここにあるだけです」

「作ってもらえるだろうか」

「はい、ただ時間がかかると思いますが」

「かまわない」
彼は買うことに決め、その場で手付けを打って待つことにした。実際に使うための五つで、眺めて暮らすつもりはなかった。
「ところでこの人はどこの漆工だろう」
「塩尻の奈良井(ならい)です」
「ああ、そこなら知っている、信州は蕎麦がうまくていいね、盛器ができたら、まず蕎麦を盛るとしよう」
その日から十日もしないうちに光岡は塩尻へ行ってみた。どんな女か確かめてみたい気持ちもあったが、体が高地を求めていた。信州の街はそろそろ雪の消えるころであった。
奈良井の宿に泊まり、次の日〝朝比奈〟という漆器店を覗くと、若女将(わかおかみ)のような女が応対に出てきて、観光地の店の人らしく土地柄などをさりげなく話した。店の棚には旅行客が求めやすい数物(かずもの)が並んでいて、光岡は小ぶりの椀を眺めていた。手にしっくりする形と大きさがよいので欲しい気がしていたのだが、内側の朱漆が彼には目障りであった。
「これの黒いのはありませんか」
「ございます、少々お待ちください」
女は内暖簾の奥へ消えてゆき、待つほどもなく戻ってきた。黒漆の椀を両手で差し出しながら、木地は同じものですと言った。年格好のわりに指先が荒れていたが、見目は涼しげで、ブラウスの胸元にネックレスが見えていたから、独身だろうと光岡は想像した。

椀を五つもらって包んでもらう間、彼は下を向いた女の額や鼻筋を眺めていたが、急にそうして取り繕(つくろ)っている自分が馬鹿馬鹿しくなって言った。
「ひょっとして、こちらは工芸展に出品した朝比奈涼子さんのお宅ですか」
「はい、私がそうですが」
女は顔をあげて、訝(いぶか)しむ目を向けてきた。
「そんな気がしました、私は光岡と言います、東京の青山であなたの盛器を買った者です」
「追加のご注文をくださった方ですね、ありがとうございます、まさかここまでいらしてくださるとは思いませんでした」
「急に信州蕎麦を食べたくなりましてね、どうせゆくなら奈良井にしよう、とまあ、それだけのことです」
光岡が砕けた調子で言うと、女も気を許したふうに笑った。蕎麦のために信州まできたという話を信じたわけでもないだろうが、そんなことを言う男がおもしろいらしかった。
「それで、お蕎麦は食べましたの」
「昼の愉しみに取ってあります、よろしかったら一緒にどうです、もう少しお話を伺いたいし」
「あいにく今日はお店を空けられません」
「そうですか、では夕食をつきあってくれませんか、宿はすぐそこです」

「お招きはありがたいのですが」
「商談ということにしてはどうです、実際そんな部分もあるし、食事をして悪いこともないでしょう」
涼子はお茶を出したりしながら考えていたが、やがて小さな声で承知した。
「せっかくですから、ちょっとだけお邪魔することにします」
そんなことを言うのにずいぶん時間をかけたものの、決めるとにっこりとして気を変えるのは早かった。
その晩、光岡は紳士的に振る舞った。宿中の者が涼子を知っているうえ、宿泊客が少ないせいか、注視されている気がしてならなかった。それが旅先の身に快くもあった。
内湯の休らいに浸って夕暮れを待っていた彼は、改めてカジュアルなスーツに身を包んで漆工を迎えた。その時点の感覚では女性というより漆工であった。仕事着のままやってきた涼子は、卓の向かいに座ると、こちらのお客になるのは初めてですと言った。
「ごゆっくりどうぞ」
料理を並べていた女中が下がると、彼らはビールで奇妙な巡り合いを祝した。光岡があの日青山へ行っていなければ今日はなかったであろうし、今日涼子が店にいなければ流れていたであろう縁であった。
「漆が用意してくれたような席ですね、気楽にやりましょう」
光岡は出任せに言いながら、女性の漆工といる雰囲気を愉しみはじめた。相性のもたらす気軽さのようなものが、向かい合ったばかりで生まれているのだった。
「工芸展での入賞も意外でしたが、今日はまた別の驚きでした、あの盛器を買ってくださる人がいて、その人が目の前に現れたのですから」
涼子は滑らかな標準語で話した。それが自然な時代になっていたが、素直で、都会的なあくのないのがよかった。
「青山の店であれを見たとき、なんだかとても懐かしい気がしたのですよ、子供のころに見た記憶があるのに状況の画像は模糊としている、しかも今の家にはありません、よい漆器は人の一生より持つはずだから、不思議でね」
「漆器は人から人へ渡ることがあります、使われて使われて、いつか消滅するころには最初の持主とはまったく縁のないところにいたりします、よいものは旧家の売立目録にも並びます」
「なるほど、そういうこともあるか、しかし私が手に入れたからには、あの盛器は一生使いますよ、といってもあと三、四十年のことでしょうが」
「ありがとうございます、あれは工芸展に出しましたが、実用向きに強くこしらえていますから優に百年は持ちます」
「そのころには作り手も使い手もいなくなっているというわけですね、使い切るなどという夢を見ていると返り討ちにあうわけだ、愉快だなあ、さあ食べましょう」
光岡は卓を埋めている料理をすすめた。旅館の食事でよいのは好きなものから少しずつ

摘まめることで、左党の締めはおにぎりでも茶漬けでもよいのだった。山裾の旅館の卓には海のものも出ていて、にぎやかである。涼子はほとんど飲まなかったが、酒席には馴れているとみえて器用に酌をし、光岡は持てなしの出任せを繰り返した。
「なにか初めての感じがしませんね、朝比奈さんはずっと塩尻ですか」
「はい、生まれてから今日まで余所で暮らしたことはありません、旅行もあまりできませんし、その意味では世間知らずです」
「工芸展には行かれたでしょう」
「行っていません、ちょうど家の用事と重なったものですから、ときどき図録を眺めて行ったつもりになっています」
　東京ですら彼女には遠いのであった。漆工の暮らしは地味で、光岡が想像する以上に仕事に時間をとられるらしく、そうした生活に狭い奈良井は向いていると彼女は話した。籠りすぎて窒息しそうになると車で松本へ出るという。そこでなにをするという目的もないので、都会の空気を吸って帰ってくるだけだと言って笑った。
「列車に乗ってしまえば東京は近いですよ」
「ええ、でもなかなか行けませんね、行っても迷子になるだけでしょうし、帰ってきたら具合が悪くなるような気がします」
　そういう女のなにかあきらめているような表情や、ときおりすっと力の抜ける居住まいに光岡は郷愁を覚えた。東京生まれの彼に遠い郷里などというものはないのだが、郷愁に似た感情はあって、接する人の心境に乗じるのかもしれなかった。ひねもす漆を塗る女と、松本へ車を飛ばす女がまだ彼の中で一致していなかった。
「毎日同じ部屋に籠って、同じ仕事をつづけてゆくのは大変でしょうね」
「それは会社員でもお医者さんでもそうでしょう、違うとすれば私の相手は口をきいてくれないことです」
　光岡はうまく笑えなかったが、そんなふうな顔は作った。食事の愉しさは語らいの愉しさでもあるので、彼女の調子に合わせながら話した。
「すると今日はだいぶ口をきいた方ですね」
「もうたっぷり、半年分はききましたね」
「それは大出血だ、エネルギーを補充しないといけませんね」
　そのとき部屋の外で声がして、女中が用済みの器を下げに入ってくると、彼は意図して聞こえるように言った。
「ところで追加の盛器ですが、いつごろまでにできるでしょう」
「木地の乾燥にあと半年はかかります、私の仕事はそれからですから早くて年明けでしょうか」
「よいものができるならいくらでも待ちますが、なにやら鶴首になりそうですね」
「機械なら木地もあっという間にできるのですが、見た目だけということになりかねません」

「なるほどねえ」
光岡は聞いているであろう女中に追加の酒を頼んで、あとは勝手にやるからと婉曲に邪魔を拒んだ。意を酌んだ女中が早速冷えたビールを運んでくると、彼はさりげなく心づけをはずんで、気は心だから、と余計な口も封じた。効くかどうか分からない。だがそんな気遣いが通じたのか、涼子は心なしか明るくなっていった。
「あの女中さん、取っつきにくい人なんですけど、笑いましたね」
「気は心ですよ、私と彼女の間にほかになにがあります」
「愛想笑いでもなかったような気がして」
「繊細な人かもしれませんよ」
また出任せを言いながら冷めた鯉濃をつついていると、彼女は不意に、ときどき漆を嫌いになることや、やはり漆工だった両親が若死にしたことなどを辛くもなさそうに話した。一家で漆に生かされていながら、最後は漆に殺されるのだと微笑を浮かべたまま言った。漆工の女に淡い興味を抱いて食事に招いた光岡は、そこまで近づいてよいものかどうか戸惑ったものの、向き合ってしまえば女のするに任せるのも性分であったから適当に相槌を打ったりした。東京の家に燻っているよりずっとおもしろいことは確かであった。
「漆塗りは今でも日本の宝だと思います、それを生業にできる幸せを味わうこともあります、ただこの歳で一生が見えてしまうのが嫌ですねえ」
彼女は言った。

「その点は私もご同様です、冒険することを忘れたせいか、大勢の人が早々と一生を見てしまう時代のようです、漆工だけが特別ではないでしょう」
「光岡さんはなんであれ答えを持っていますね、どこで学んだのですか」
「夜の巷です、早朝の公園なんかで野良猫からも学びましたね、教師に不自由したことはありません」
「勉強になります」
「真似はしない方がいい、職人が馬鹿をすると美しい塗りが剝げます」
そう言った光岡も涼子も笑った。
「実におもしろくなってきました、もう少し酒をやりませんか」
「そうしたいのですが、お酒はいただけません、これから車を運転しますので」
「それはまた、そこのお店に住んでいるものとばかり思っていましたが」
「店は兄の代で、私は職人兼雑用係のようなものですから、アパートに暮らしています」
「そういうことなら今日はタクシーで帰りなさい、私が持ちますから」
「そんなもったいない」
彼女は言い、それからまもなく卓の上の食器を無意味に整えて帰っていった。光岡が宿の玄関先まで見送りに出ると、あたりはもう暗く、ひっそりとした通りを場末に向かって影のように去ってゆく姿が眺められた。そのときになって彼は旧街道の家並みを保存する通りには車の置き場のないことに思い至った。同じことで涼子も身の置きどころがないの

かもしれないと思いながら、部屋に戻るとしかし、急に酔いがまわって、いつのまにか敷いてある布団に無様な格好で潜り込んだのであった。

盛器の完成を待つ間、光岡はときおり涼子を思い出しながら奈良井に訪ねることはしなかった。経営する貸しビルのひとつが老朽化して、山ほどある修繕を妻ひとりに任せておけなかったし、息子の達也はまだ子供で頼りにならなかった。

平素は管理会社に委託している業務も、監査を怠ると先方の利益優先という構図になりかねない。妻の佳枝は数字には強いが、光岡家の嫁という呼称の似つかわしい人で、おとなしい。交渉事や追及には向かない。祖母方の縁戚にあたる家の生まれで、十九で嫁いできたせいか、未だに本家に仕えるふうがあった。光岡は佳枝がこっそり実家を援助していることに気づいていたが、知れた額なので放っていた。そのことに佳枝も気づいて、頭が上がらないのかもしれない。

「今度の修繕は大がかりだが、年内には終えたい、外観より配管に金をかけなさい」

「そのつもりでいます」

佳枝はとにかく従順で、しかも物事にあわてないところがあった。おとなしいわりに家政婦を使うのがうまく、勝手向きは彼女の才覚でまわっていると言ってよかった。それでいて夫には控えめに物を言うのだった。

光岡の家は商才のあった祖父の代に成り上がった地主で、戦後の大森や馬込界隈に資産を築いた。その資産を父が継ぎ、土地を貸し、売り、ビルを建てて増やす中で光岡は育った。飢えはおろか空腹すら他人事の家庭であったが、教育はきびしく、ためにならない散財や遊びは一切許されなかった。たまに逸脱すると殴られる。反抗すると丸刈りや禊が待っていた。冗談だろうと思ったが、父は本気で、母はとめる術を知らなかった。若い身には息苦しいだけであったから、彼は両親を尊敬したことはない。だから自分の子供は放任して、なるようになればいいと考えた。

今も暮らす大森の家には父が遺した大仰な仏壇があるが、香華を供えるのは佳枝で、光岡は手を合わせることもしない。それで罰も当たらないと知ると、家風とともに宗教も人生から排除した。そうして自分を片づけてゆくのがひとつの目的になると、欠いてきたものに愛執を覚えたりもするのだった。

人に無理強いをしないという生き方は、なりゆきに任せるという消極的な生き方でもあるが、そういう性質ができあがってしまうと楽でもある。妻にも一個の人間を見るし、たいていのことは許せる。達也が家業は継ぎたくないと言ってきたときも、光岡は顔色も変えずに、ゆっくり考えてみるさと言ったきりであった。いずれ遺産は継いでもらうしかないので、そのときがくるまで男として可能性を試してみるのもよかろうと思った。

「おとうさんはどうでもいいんだね」

彼は言った。

「そう思うか」
「だって、なにも反対しないじゃないか」
「反対してほしいのか、理屈に合わないぞ」
「物分かりがよすぎるよ」
「悪いが、理想の父親にはなれそうにない」
そんなやりとりのあとにはつまらない感傷が残ることがあったが、数分のうちに気を変えられるようになっていた。彼が最も不得手なのは人を苦しめたり無駄に悩ませたりすることで、きっかけはその罪過が自身に返ってくるという現象を若くして知ってしまったことであった。けれどもそれを宗教的な理屈に結びつけることはしなかった。父親がそんな歳でも境遇でもないのに正気を失って終わってゆくのを見たとき、彼は生きたように死んだだけのことだと思って済ました。残した財貨がなんの証(あかし)になろう、そう思い、金庫がひっくり返るまで蹴飛ばしてやったが、やはり罰は当たらなかった。
遺産というありがたい重荷がその後の人生を決めてからも、彼は飄々(ひょうひょう)と暮らすことに努めた。豪遊を愉しめる身分であったが、場末の酒場で飲んだくれながら普通の人を観察したり、処世に長けた年下の女性に遊ばれたりもした。するうち人生の時間を浪費している自身のくだらなさにはっと気づいて、洗ってくれそうな清浄な空気を求めた。強いられた禊とは違う。試しに穂高(ほたか)へ行ってみると、果して愚かな渇きの特効薬であった。味を占めた彼は小さな旅を繰り返し、旅先の宿に休らい、わけても高地の古い家並みと空気に憩うようになっていった。そうした月日があって、今を無事に生きていられる気がするのだった。
修繕の段取りを終えて工事に入ると、東京は蒸し暑い夏になっていたが、どうせ汗を掻くなら、と光岡は珍しく働いた。所有するビルやマンションはどれも古くなっていて、早晩なにがしかの手入れが必要になるはずであったから、この際自分の目で確かめておこうと考えた。自ら写真を撮り、データ化し、注意書きを添えて佳枝に渡すと、残暑の季節であった。あとは優先順位を決めて一棟ずつ片づけてゆくしかなく、その計画は佳枝に任せても大丈夫だと自信していた。
一仕事を終えると、彼は佳枝を連れて鮨を食べに行ったり、ひとりで美術館へ出かけたりした。絵画の鑑賞だけはひとりでするのがよく、終わるとその辺の飲食店で図録を肴に一杯やってから帰るのが常であった。傍目にはさして意味があるとも思えない時間が彼には愉しく、大切であった。家の近くまできて行きつけのバーに寄ることもある。カウンターの内側に寡黙な女がいて、笑わせたら寝てくれるという噂であったが、実現した男はいなかった。光岡が美術展の図録をひらくと、
「いい趣味ですねえ」
と言った。
「興味がありますか」
「そんな教養はありません、見れば分かるでしょう」

素っ気ない遇(あしら)いのわりに客足が絶えないのは、なんでもいらっしゃいといった感じの女の雰囲気がおもしろいからであった。静かな店の居心地よりも、その表情に値打ちがあった。光岡は三十分も飲んで引き揚げるが、いつも思うのは高地へ連れていったら笑うのではないかという密かな期待であった。どこかで明日の空白を怖れるせいか、そんなことでも彼の一日は充たされた。

やがてのろのろとやってきた春の日、青山の食器店から連絡があって、涼子が自ら盛器を届けにきていると知ると、彼はすぐ出かけていった。あの涼子が東京へやってくるとは思ってもみなかったので、年甲斐もなくそわそわして仕方がなかった。

午後の街はどこも人通りが多く、青山にも人が流れていた。店の近くでタクシーを降りて入ってゆくと、数人の客がいて、涼子は片隅に立っていた。手に「朝比奈」の手提げ袋を提げている。照明のせいか少し印象が違って、長い髪はポニーテールであった。

「やあ、しばらく、できたのですね、よくいらっしゃいました」

向き合うと、なんどり美しい顔が笑った。

「長いことお待たせしました、新宿からこちらへくるのにやっぱり迷いました」

「電話をくれたら迎えにいきましたよ」

光岡は出任せに話しながら、本当にそうしただろうと思った。

店員が形ばかりの休憩所に茶を出してくれて、彼らはそこで完成した盛器を眺めた。

「いやあ美しい、見事ですね」

「精一杯やらせていただきました」

そういう顔にも充足が見えて、線の細い女性ながらよい仕事をした職人の表情をしているのだった。光岡は特別漆器に詳しいわけではないが、定着した塗りの落ち着きと光沢くらいは分かって、これが百年の塗りかとしみじみ見入った。

「ところで、どこかでゆっくり話したいのですが、時間はありますか」

「明日の朝には帰らなければなりません」

「それは忙(せわ)しない、お泊まりはどちらです」

「新宿のビジネスホテルです」

「せっかくいらしたというのに、それでは東京を見たことになりませんね、せめて新宿の街なり夜景なりと見ましょう」

どこといって行くあてもないまま光岡は外の世界へ誘った。名所を巡る時間もないので車から皇居を見せて、新宿の飲み屋街の焼鳥屋に肩を並べたのは夕暮れのことであった。

「これも東京の顔です、というか縮図かもしれない、戦後の闇市からはじまった人生劇場のなごりでしょうね、客もおとなしくなりましたから、くつろいでください」

「ちょっとした集落の感じがします、煙のせいでしょうか、外国人の方もいますね」

テレビでも見られる光景であったが、興奮気味の涼子の目には異質なものに映るらしかった。

「松本あたりにもあるでしょう」
「繁華街はありますが、雰囲気が違いますね、ここまで砕けた感じではありません」
「お客はたぶん地方出身の人が多いと思いますよ、根っからの東京人は結構おとなしく暮らしていたりします、東京タワーに登ったこともないとかね」
「光岡さんはどうです」
「小学生のときに学校のお仕着せで登ったきりです、そんなものです」
「お仕着せというなら、私の通った小学校の必修は漆塗りでした」
「小学生のときからですか」
「ええ、家でもやっているのにと思いましたが、そうでもしないと後継者が絶えてしまうという危機感があったようです」
「一日見学の東京タワーとは違いますね」
光岡は女とするそんな話が好きで気分がよかった。厚いグラスの酒が美味く、見ると涼子も飲んでいる。小ぶりの焼鳥が舌に合って、馬鹿にできない味わいがあった。
「あれから一年近く、仕事に乗れなくて困りました」
と涼子はひたすら機械的に数物を作っていたことを話した。木地もできていないのに頭から盛器が離れなかったという。量産できない品に気持ちが向かうのは職人の贅沢でしかないが、創作を忘れてはつまらないとも言った。光岡にはそんな一年はないので、羨ましく思った。

「焼鳥を食べながら話すことでもないようです、これを飲んだら場所を替えますか」
「ごめんなさい、そんなつもりで言ったのではありません、籠る仕事のせいか話題が乏しくていけません」
しばらくして光岡は高層ホテルのラウンジへ涼子を案内した。彼も久しぶりで、運よく窓際の席から夜景が眺められた。明かりが多いほど夜景は美しく見えるものだが、彼はすぐ飽きて涼子に目を戻した。飲物を運んできたウェイターが下がるのを待って、彼女は話した。
「贅沢な空間ですね、私の仕事場の百倍はありそうです」
「ただのコンクリートの箱ですよ、カーペットと照明でなんとか持ってる、こういう場所のよさは人目を気にしなくてすむことでしょう、奈良井の旅館の女中さんは元気ですか」
「はい、あれからなんとなく親しくしてくれて、駐車場で会うと声をかけ合うようになりました、漬物をくれたりします」
「淋しいのかなあ」
「光岡さんはいつくるのかって、よく訊かれます」
「なんだ、心づけが目当てか、分かりやすくていいね」
笑いのうちに酒がすすむにつれて緊張がほぐれたのか、涼子がハンドバッグから小箱を取り出して、
「こんなものを作ってみたのですが、使っていただけますか」

と言った。箱を開けると、中身は印籠を模した名刺入れらしく、中に涼子の名刺が入っていた。漆塗りの表面に更に黒漆で蜆蝶が描かれているのが洒落ていて、手にしたときの姿が美しかった。

「粋だなあ、しかしこんなものから名刺を出したら、相手が驚きますね」

「そこも狙いです、お話のきっかけになるかと思いまして」

「そりゃあ、なります、これを見て黙っているような人とはつきあえませんよ、それくらいいいです」

光岡は世辞でもなくそう言っていた。涼子の気持ちがうれしかったし、実際手中のものは美しかった。木地の乾燥を待つ間にこんなこともしていたのかと思うと、自身の生温い生きようにも改めて思い至った。ひたぶるに努める人を知れば、努め足りない自分を知るのが人間であろうが、すぐさま努めることもできない彼は目の前の精華に女の胆力を見るのが精々であった。

「盛器も素晴らしいが、これにはまた別の喜びを感じます」

「漆の質感や可能性を感じていただけたなら本望です、今日日の商品としては落第でしょうが、明日の夢にはつながるでしょうから」

「漆工がそこまで考えているとは誰も知らないでしょう、私は知ってしまった、うまく言えませんが、とてもありがたいことです」

光岡は出任せではなくそう言いながら、記憶に残るであろう一日を予感した。控えめな明かりを浴びて、小さな携帯品もそれを生んだ漆工もふたつながら輝いていた。とことん飲みたいと思わせる条件が整ったように思われ、彼は強いカクテルを注文した。しかし涼子は意外に強く、彼と同じペースで飲んでいながら酔っているようには見えなかった。

「半日前に塩尻の駅に立っていた自分が幻のようです」

と平然とした顔で言った。

「清々しい顔をしていますよ」

と光岡は彼女のあわただしい一日をねぎらって、乾杯した。明日の朝には帰る人であったが、まだ肝心なことを話していない気がした。テーブルに置いたままの名刺入れをさすりながら、なぜ蜆蝶なのかと訊ねると、嫌みがないからという返事であった。気障りですか、と逆に訊かれた。

「まさか、この感触は好みです」

「盛器の底にも置いてみようかと思いましたが、勇気がなくて」

「底ならかまいませんよ」

話は漆へ戻っていったが、それも自然な流れの夜であった。ひとつの仕事を終えた女の明るさが、上京という形で男の無為な日常をも染めはじめているのだった。涼子は帰るときを忘れて都会の居間にくつろぎ、光岡は美しいものの尽きない一日に充たされながら快く酔っていた。

ばいいようなものだが、そっちの方が勇気がいるらしかった。ただの風船だったらどうするのかと想像すると、おかしかった。

「ところで商売はどう」

「まあまあですね、思うようには捌けませんけど、潰れもしないし」

「いっそ人間国宝を目指すか、肩書きで売れるらしい」

「まず年を取らなければ無理でしょう」

涼子は皮肉を言って笑った。

「創作も商売の傍らでは気力がいるね」

「はい、でも来年はまた工芸展に出品してみるつもりです、図案ではいい感じになっているので、おもしろいものができるかもしれません」

「ものはなんだろう」

「料理の器をイメージした合子です、和食でもフランス料理でもいけると思います、塩尻のレストランのシェフに相談したら合格でした、でも家庭向きではありません、本当はそっちを作りたいのですが、需要がなくて」

変わらない悩みと涼子は闘っているらしく、漆器店の安全な仕事だけでは充たされない口ぶりであった。

塗物の商売がむずかしくなっているのは事実で、持ちがよいだけに同じ物を買う人は少ない。そのあたりは光岡にも分かることであった。なんでも安い物で間に合う社会になって、本物は裕福な人が求めるものになっていたが、そういう人こそ好みがうるさく、漆器を前世紀の遺物に見たりするという。すると購買層はますます薄くなる。そのうち漆器は芸術品になってギャラリーでしか見られなくなるかもしれない、と涼子は冗談半分ではなく案じていた。

「まあ、腐らずにできることをやってみるしかないな、なにがきっかけで持ち直すか分からない、製造業にはそんな話がよくある」

「そうね、でも私にはそのきっかけがちっとも見えてきません」

「すぐに見えたらつまらない」

「みんなあなたのように物分かりのいい人だったら、世の中つまらないでしょうねえ」

「藪蛇だな」

光岡は苦笑したが、くさされている気はしなかった。そのうち派手な幟が見えて、ソフトクリームの屋台と知ると、涼子を誘って食べにいった。近づくと屋台に見えたのは小型車で、湖の汀がすぐそこであった。少し沖を大学のボート部らしい細長いエイトの艇が過ってゆく。ふたりはバニラとチョコレートのツイストをもらって、子供のように嘗めながら立っていた。風が少し立ってきて爽やかであった。

「若い人は遊びであれスポーツであれ夢中になれていいね、その意味では君もまだ若いってことだな」

「腰痛で寝付けない夜もあります、次の日車に乗るとき、よっこらしょをするんです」

「腹巻きをしてか」
「よく分かりますね」
そんなたわいない話が歳月を重ねたふたりにはなぐさめであった。涼子の目は湖上のボートを追いながら、静かな流れに乗って過ぎ去った歳月を追いかけているようでもあった。

この続きは製品版で
お楽しみ下さい。